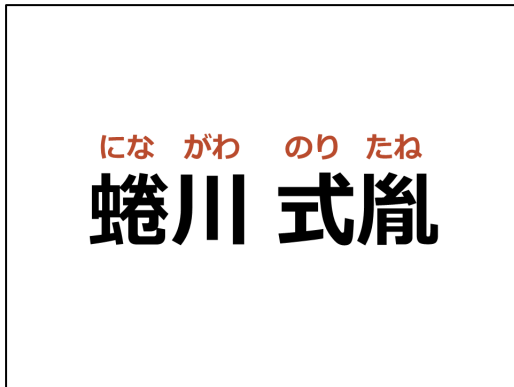


■蜷川式胤がふれた奈良の人々



早速ですが、皆さんはこの名前をご存知でしょうか。今回は、この「^{にながわのりたね}蜷川式胤」という人にまつわる話をしたいと思います。蜷川式胤は明治初期の官僚で、博覧会の開催や常設の博物館の開設に熱心に取り組みました。その中でも良く知られた功績が「社寺宝物検査」です。別名「^{じんしん}壬申検査」とも呼ばれ、文化財保護の原点になった調査とも言われています。140 年程前に、東海・近畿一円の社寺仏閣の調査が行われ、当時文部省から参加していた式胤が調査の記録として「奈良の筋道」を残しました。

「奈良の筋道」には、「街中に道しるべがなく、地元の人に道を尋ねると、どの人も尋ねた場所だけでなくその名所旧跡のいわれを詳しく話してくれる。地元の人たちは、他から来た人だと分かれば、誇らしげに昔のことを話してくれる。自分たちが代々住まう土地の事を尊ぶ気風が、今日の文化財保護につながっている」と記されています。

おそらく当時の奈良の人々には、他の地方から来た人に対して名所旧跡を「我が郷土の誇り」としてとうとうと語る人情や気風があったのではないかと思います。その背景にあるのは、古代以来の由緒をもつ社寺に日頃からお参りをしたり、行事などに参加することが多くあった為、日々の暮らしに社寺との接点が溶け込んでいたのだらうと思います。奈良の人々が信仰やしきたりや行事を受け継ぐ中で触れてきた自然や文化は紛れもない本物で、それを肌で感じて深く知れば、他の人に語らずにはいられない。そういったものを式胤は感じたのだらうと思います。

■自分の言葉で語るということ

私自身の記憶を思い起こすと、小学校低学年の頃から祖父に連れられておん祭りに来ていました。三条通りの人だかりの中で、祖父に肩車をしてもらいながら御渡り行列を見せてもらった記憶があります。肩車をしてもらっている祖父が、「もうすぐ毛檜けやりがくるぞ」などと、その都度通り過ぎる祭具につい



で説明をしてくれました。おそらく、祖父はおん祭りの謂れを色々と知っていて、己の生活の中に結び付けてストーリーとして話すことができたのではないかと思います。祖父が私に語ってくれたように、私は今の子どもたちに同じように語れるのだろうかと思問するとともに、これからグローバル社会に出ていく子どもたちの事を考えると、もう少し自分たちの町の文化や歴史や伝統を、彼らに沁み込ませておかなければならないと思います。この奈良で生まれ、奈良で育ち、奈良で学ぶ子どもたちには、奈良らしい教育として取り組んでいる世界遺産学習を原体験として、自分の言葉で語れるようになってほしいと願っています。

■身近なものから「深く知る」

深く知る

世界遺産学習を充実したものにするには、「深く知る」ということが大切になります。その為の特別な知識や技術は必要ありません。例えば、私はこの式胤の話も、「明治時代に国の役人が奈良の人に道を尋ねたら、その土地の話を誇らしげに語ったという記録がどこかにあるらしい」という話を耳にしたことがあったのを思い出し、調べてみたのです。そして、その記載があるらしい書物

に目星をつけ探したところ、市立図書館に辿り着きました。そして探し出した書物を読み解いたのが、先ほどご紹介した「奈良の筋道」の話です。ふとした時に、自分たちが身近に聞いた話や調べた事をもう一度調べ直してみる。深く知って掘り起こしてみる。そこから自分たちの町々にある誇りに辿り着くこともあるのではないかと思います。歴史や文化財の専門家でない私が辿っていけるのですから、もっと造詣の深い先生方はさらに多くの話に辿り着かれることでしょう。

■おわりに

本日は蜷川式胤の話をいたしました。これまでに森鷗外、鑑真和上、棚田嘉十郎など様々な人の話をしてきました。単に人物を知ってほしいということではありません。私が伝えたいのは、身近にあるものをもう一度掘り起こし、自ら調べて深く知ったことを誇らしげに語って伝える子どもを育ててほしいという思いです。どうか皆さん、自分の時間とお金を費やして、身の周りにある本物に触れ、肌で感じ、深く知るという行動を積極的にとっていただきたい。そして、子どもたちの良い手本となっていきたいと思っています。子どもたちが成人し社会へ出た時に、自分の言葉で故郷を語れるような子どもを育て、それが私たちの願っている世界遺産学習なのです。